

# 研修だより

No.8

## 子どもが主体的に学ぶ授業とは??

「主体的に学ぶ」「自ら学ぶ」「教師が教えるのではなく、子どもが学ぶ」「子どもが主人公」「子どもが主語」



豊成の研究においても、何年間も「主体的に学ぶ子の育成」を目指していますし、近年、多くの学校で子どもの主体性を育てようと取り組んでいるところです。

研究部員として「まずは自分が実践！」と意識して学習指導を進める中で、この3年間、日常の授業で気を付けていることがあります。

それは・・・**子どもの発言を言い換えない！！**ことです。

例えば、算数で子どもが、「まっすぐの線」と発言したら、前までの私は「直線ね」と言い直していたところを、ほかの子が「直線」と言い出すまで待つということです。

「まっすぐの線」のまま授業を進めていくと、意外と**必ず**誰かが「直線」という言葉を使い始めます。

そうしたら、「直線ってなに？」などと言っていると、「さっき〇〇さんが言ってた、まっすぐの線のことだよ」や「先生、教科書〇ページに書いてあります！」などと、正しい用語や内容を、子ども自身が導き出します。

8月末に、筑波大附属小学校算数部の森本先生の授業を参観しました。

講演で森本先生は、「**教師の言って欲しい言葉や発表をしようとする子どもに育てちゃだめだと思う。それでは主体的に学ぶ子どもなんて育たない。**」とおっしゃっていました。参観した授業でも、森本先生は、5学年の授業で「長方形」という言葉がなかなか出ない中でも、自分から言うことも、まして誘導することはありませんでした。「四角」「そっちの四角」などと子どもが言っているうちは、「で、そっちの四角について説明して」などと子どもの言葉をそのまま使い、誰かが「長方形」という言葉を使いだすと、「へえ、そっちの四角って長方形っていうんだあ」などと、そこから「長方形」というワードを使い始めるのです。

子どもの感性や感覚は、私たち大人の想像する世界とは異なると思います。

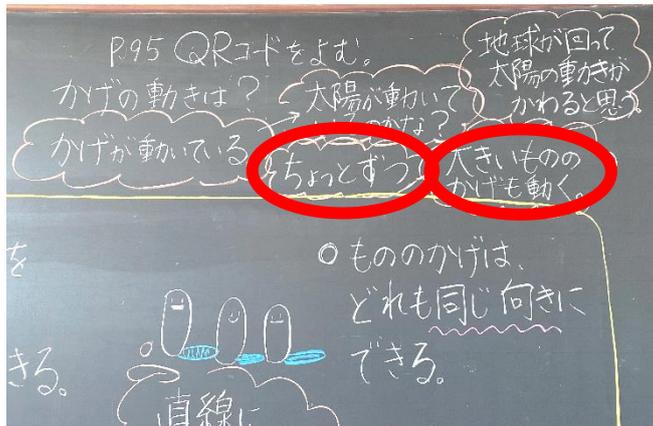
たまに、自分が熱をもってどれほど一生懸命に説明しても伝わらないのに、さほど勉強の得意ではない子が、「これは、～～だから、△△なんだよ。」とぼ～んと発言すると、「先生！わかった！！」と嬉しそうに笑顔満々で子どもが言い出す場面はありませんか。

私は、よくありました。そして、少し前までの自分は、ちょっと悔しいとすら感じていました。

そういった経験から、**子どもの力を信じて、子どもたちの言葉のまま授業をしていけばよいのだな、**と思うようになりました。豊成小で研究を進めていく上で、自分自身が最も気を付けていることであり、近年、「教師はファシリテーター」になると言われることも、こういうことなのだろうと受けとめています。

## 子どもの言葉をそのまま板書に残し、単元の後半で回収する！！

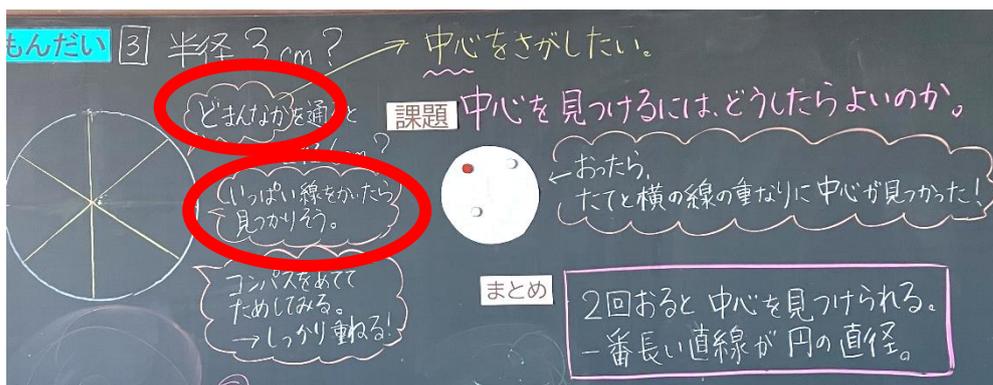
私は子どもの言葉を使うときには、オレンジチョークを使って囲んでいます。そして、自分の言葉に置き換えてしまわないようにしています。



←「かげと太陽」の学習では、スカイツリーの影が時間経過とともに動いていく動画を観た後だったので、「**大きいもの**の**かげも動く**」と気付いたことを発表する子がいました。この発言は私の予想にはなかった答えで、子どもの感覚を大事にしたいなと思ったので、板書しました。

もしかしたら、子どもたちの感覚として、人間の体くらいの大ささのものならイメージがわくけれど、スカイツリーや富士山など大きなもののかげがイメージできなかったのかもしれない。そして、だからこそ影を扱った動画に、スカイツリーや富士山などを扱う教材が多く、それは子どもの思考をとらえた先生方が研究して作ったものなのだと

も気付かされました。「ちよっとずつ」という言葉も、指導事項の「太陽は、東→南→西へと動く」につながる発言です。これを「時間が経つにつれ」などといかにもわかった風な言葉に言い換えてしまうと、子どもたち自身が授業をつくり学ぶ感覚にはなりにくいだろうと、私は考えています。



←「中心」という言葉が出ずに、「**どまんなか**」と言い出したので、よい感覚だなと思い、そのまま板書しています。

誰かが、中心と言い始めたので、「中心？」とかとぼけていると、「昨日、ノートに書いた！」だとか、「教科書〇ページに書いてあります」などと言い出します。

「**いっばい線をかいたら（中心が）見つかりそう**」と言い始めたので、たっぷり時間をとりました。うまくかけず失敗する経験が、子どもたちの中に広がっていく中で、「まあまあかけた」とか「多分こんな感じ」などと、正確さが無いことを自認するつぶやきがわいてきます。そういうことを経て、違うやり方なのかな？と考えだします。そこで**無言**で紙に印刷した円を子どもたちに渡すと、「あやしい…」と次の思考が生まれていきます。

板書自体は、あまり綺麗なものではないですし、授業の構成も当たり前のことを進めているだけなので、特筆する内容でもないのですが、子どもが自分たちの力で学んでいるという実感をもつためには大事なことだろうと考え、行っている実践です。時間がなく指導事項を押さえたいときには、「**教科書には、なんという言葉で書かれている？**」というようにしています。もし、どなたかの参考に少しでもなれば嬉しいです。

おそらく、それぞれの先生方が、「主体的に学ぶ」授業になるために実践されていることは、ほかにもたくさんあると思います。もし、紹介していただけたら、互いに学び合える研修となると思いますので、研究部に声を掛けていただいたり、教えていただいたりしたら嬉しいです。秋山先生は、授業研後にリベンジと、反省で上がったことをすべて盛り込んだ個人授業研をしてくださいました。「自ら学ぶ」を実践していますね。

公開研まであと1週間半。**子どもたちが考えることが楽しいと感じ、自分たち、子どもたちの力でやり遂げた！と感じる授業**になったらいいなと思っています。授業者だけではなく、全員の教職員で目指していきましょう。